

あなたと博物館

HIRATSUKA CITY MUSEUM '90 1月号

特集 一馬一



中井町遠藤原の日枝神社水鉢

馬の毛色の呼びかた

人と馬との関係は古く、紀元前3千年前後の古代都市文明の遺跡から、飼育を物語る遺物が出土しています。日本でも昔から相性に合う馬に乗るという、吉祥的な考え方から毛色を問題にしていました。すなわち鹿毛、栗毛、青毛、月毛、河原毛、雲雀毛、葦毛(あしげ)、糟毛、鼠毛(はいげ)などと区分し、親しんできました。

それでは、このほかにどんな分別をしたか、辞書から拾ってみると、面白い漢字が出てきます。

駟(ハウ)青白色の馬・駮(ハク)、馬牙(ライ)
駿(シュン)まだらの馬・馬幹(セイ)赤馬・馬雄(スイ)ねずみ毛の馬・駮(キ)黒みどりの馬・駮(カ)赤白雑毛の馬・駮(キ)浅黒または白馬・駮(エイ)黒馬・馬麓(レイ)深黒色の馬・駮(ハウ)白色に黒褐色の混じった馬などがあり、特徴をとらえた、馬牙(シュ)口の黒い馬という漢字もたくさん出てきます。いずれにしても、日本の呼称の連銭葦毛(葦毛に灰色の円い斑点のまじったもの)の方が、具体的で親しみやすいものでしょう。(博物館長)

特集 一馬一

平塚周辺の 馬をめぐる民俗

今年は、十干十二支を組合せた干支でいえば庚午（かのえうま）年です。新年にちなんで平塚周辺で見られた馬の民俗を紹介します。

私たちの生活のなかから馬の姿が消えてどのくらいたちますでしょうか。少なくとも昭和30年代の初め頃までは馬を飼う家が、平塚でも見られました。昭和24年2月1日現在の統計（『昭和23年神奈川県統計書』昭和25年3月、神奈川県刊）によれば旧平塚市では10軒の家が11頭を飼い、旧中郡では306軒が311頭を飼っていたとあります。大半が農耕馬で、旧平塚市・中郡で馬を飼う316軒のうち290軒が農家でした。

動力耕うん機が普及するのは、昭和30年代の後半以降で、この統計書の時代は牛馬がもっとも盛んに使われた時ではないでしょうか。太平洋戦争が終わり、復興へと向い始めた時代です。

牛馬を農耕用に使うというのは、牛馬に犁（すき）を引かせて田畑を耕したり、荷車を引かせたり、さらに田畑の肥料となる厩肥をとるという使い方です。同じ年次の牛の飼育は、旧平塚市・中郡で7064軒、7930頭（内役肉用牛は5572頭、乳牛は2358頭）とあり、馬の飼育をはるかに上回っています。農耕用としては牛が一般的であっても、馬の方が作業が早いからなどの理由で飼う家がけっこうあったわけです。

さて、馬に関する民俗で興味深いのは、草競馬と農馬の伝承です。草競馬は神社の祭礼のなかで行われた行事で、平塚では岡崎の岡崎神社、土屋の熊野神社、中原の権現様があり、周辺では中井町遠藤原の日枝神社があります。馬の姿が彫られた水鉢は、中井町の日枝神社にあるもので明治23



平塚市南原の馬頭観音

年の銘をもっています。日枝神社の前には小田原道と呼ばれるまっすぐな道（平塚市と中井町の境界にもなっている）が通り、ここを馬場としたのです。いわゆる鉄砲馬場という直線コースで、中原の権現様の馬場も今の中原小学校の南側の道路で、鉄砲馬場でした。土屋の熊野神社も鉄砲馬場でしたが、ここでは流籠馬（やぶさめ）が行われていました。

農馬というのは、農耕用に他の地域に馬を貸す習わしで、土屋や吉沢で行われていました。土屋や吉沢では、田を耕す季節になると西郡（にしごおり）に馬を貸し、その礼として米をもらっていました。西郡というのは、酒匂川沿岸の開成町・南足柄市・松田町・大井町周辺のことです。田を耕す時期になると、畑作地帯から水田地帯へ馬の大移動が見られたわけです。

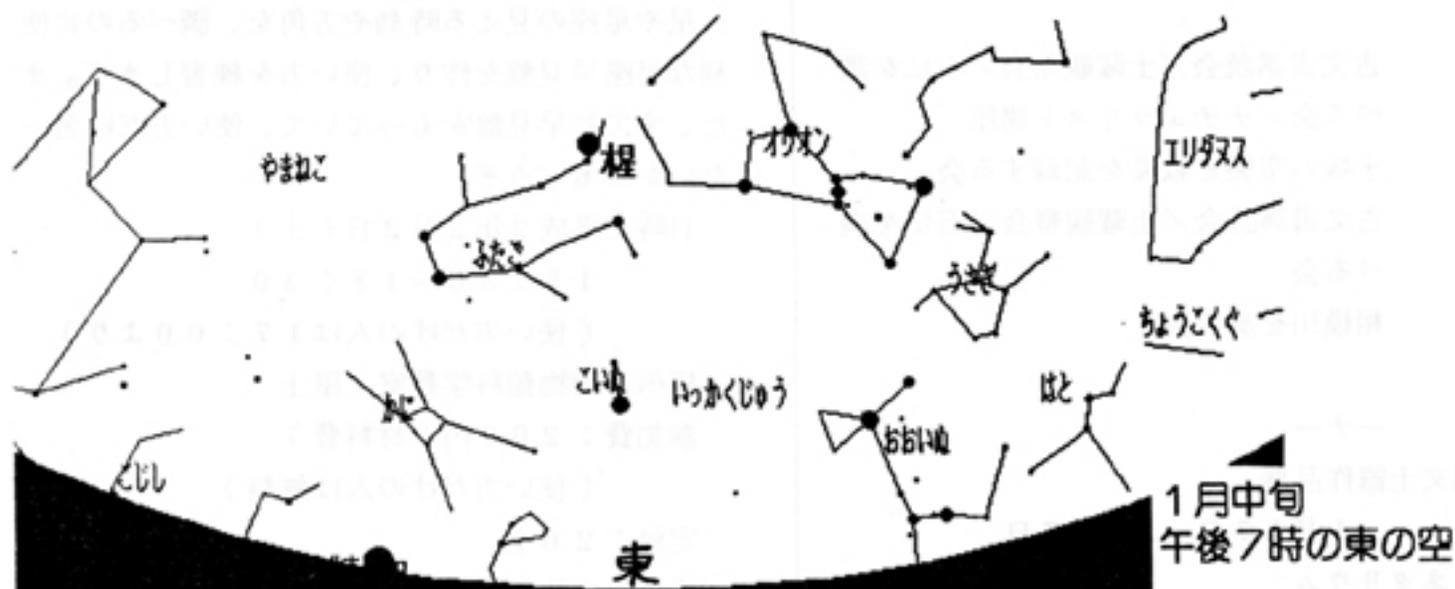
馬頭観音は、こうした馬が死んだときの供養塔です。写真は南原にある塔で、3面の怒った顔が彫られ、典型的な馬頭観音像といえます。

（小川学芸員）

プラネタリウム

木星にせまる 1月13日～3月4日

太陽になりそなた星、と言われる太陽系最大の惑星、木星。そこでは星空や太陽、地球はどのように見えるのでしょうか。また、木星はアメリカの惑星探査機ボイジャーによってそのなぞがとかれてもきました。いま空高くにかがやく木星をながめながら、木星の素顔にせまってみましょう。



夜空に輝く巨星

夜7時、東の空をながめると、オリオンを中心とした冬の星座たちがさんぜんと輝いています。オリオン座と並ぶようにして左側に強く輝く星が見られます。その輝きは全くまたたかず、堂々としています。この星に古代のギリシャ人達は最高神、ゼウスを当てはめました。太陽系最大の惑星、木星です。

木星の顔はどんな顔？

去年の春ごろまで、木星を望遠鏡でながめると、表面には太い二本のしまもよう（北、南赤道縞）が並んで見えていました。ところが秋に見ると南のしま（南赤道縞）が良く見えなくなっていました。

写真は89年11月の木星の写真です。横に伸びるしまが一本になっています。南のしまの薄くなった現象にともなってもう一つ注目したいことがあります。それは大赤斑と呼ぶだ円形の赤い大きなもようです。大赤斑はここしばらくの間あまり赤く見えませんでした。ビデオで見ると少し赤くなってきました。

アメリカの探査機ボイジャーが近づいて撮影した木星の表面は大変細かく、大赤斑の中のようすまでもがはっきりわかります。



木星から見る星空

地球から私たちが見ている星座は、木星から見ると形が変わったり星の明るさが違ったりするのでしょうか。実は変わらないのです。星座をつくる星は大変遠く、地球と木星くらいの距離ではほとんど変化しません。しかし、太陽や惑星の明るさや動きは変化します。木星から見る地球は、金星のように満ち欠けして見えることでしょうか。星空の動きも地球とは違い、北極星のまわりをまわるような動きには見えません。

今回のプラネタリウムでは木星上での星の動きを見てみることにします。（鷹学共員）

*** 行事案内 ***

1月

- | | | |
|----|---|---------------------------------|
| 13 | 土 | 古文書講読会／土曜観察会／石仏を調べる会／ナチュラルリスト講座 |
| 20 | 土 | 平塚の空襲と戦災を記録する会 |
| 27 | 土 | 古文書講読会／土曜観察会／石仏を調べる会 |
| 28 | 日 | 相模川を歩く会 |

○寄贈品コーナー

- ・縄文土器作品展

1月17日～2月27日

○プラネタリウム

- ・北極星が変わる：1月7日まで
- ・木星にせまる：1月13日～3月4日

2月

- | | | |
|----|---|---------------------------------------|
| 3 | 土 | 体験学習「星座早見を作ろう」 |
| 10 | 土 | 古文書講読会／石仏を調べる会／土曜観察会（新聞作り）／ナチュラルリスト講座 |
| 17 | 土 | 平塚の空襲と戦災を記録する会 |
| 24 | 土 | 古文書講読会／土曜観察会 |
| 25 | 日 | 相模川を歩く会 |
| 27 | 火 | 石仏を調べる会 |

○寄贈品コーナー

縄文土器作品展：2月27日まで

○プラネタリウム

木星にせまる：1月13日～3月4日

●1月寄贈品コーナー：縄文土器作品展

8月の体験学習「土器作り」に参加した親子10組の作品を展示します。20点。

・会期：1月17日～2月27日

●体験学習「星座早見を作ろう」

星や星座の見える時刻や方角を、調べるのに便利な星座早見盤を作り、使い方を練習します。また、すでに早見盤をもっていて、使い方だけ習いたいかたもどうぞ。

日時：平成2年2月3日（土）

15：30～18：30

（使い方だけの人は17：00より）

場所：博物館科学教室・屋上

参加費：200円（材料費）

（使い方だけの人は無料）

定員：20名

申込み：往復はがきに住所・氏名・電話番号をお書きの上、博物館学芸係までお申込みください。（1月25日必着）



あけましておめでとうございます。

年初めは「馬」をめぐる話の特集です。馬は、古くは神の乗り物と考えられていました。祭礼に馬が加わり草競馬が賑わうのも、馬の動きによって神意を卜した名残りではないかと思えます。一般に「岳」とよばれる山は、神の住む山ですから、「駒が岳」ともなれば、神馬に乗って神が降りた山として、特に神聖視されたに違いありません。1963年の春、鎌倉八幡宮の前を馬に乗った人が通ったので、びっくりしたのを覚えています。いま大井競馬場の厩舎は、若いギャル達の憧れの場所の由、これもびっくりです。暮しに馬がいなくなり、「めんこい子馬」を唄う子はいなくても、手綱を手に峠を越えていった馬子衆の唄は、今も各地ののど自慢に唄いつがれました。ハイハイドウドウ、本年もどうぞよろしく願いたします。（和田）

Vol.14 No.10通巻160号 印刷 平塚市総務部総務課文書係 ○3.500
あなたと博物館

発行 平塚市博物館 〒254 平塚市浅間町12-41 Tel. 33-5111